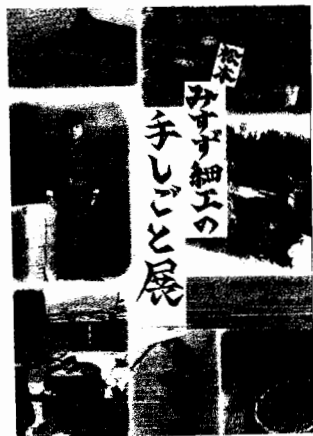


報 龍 屋 新 聞

狂騒の三月が巡ってきた

ひた隠しにするのが、原子炉を爆発させた、東京電力の仕事は、うちまは晒し者になるのが仕事。この三月は晒しのオンパレード。

手始めは松本のみすず細工の手しご展。手しごと展(三月十日)の47万円



一度消えたみすず細工の復元を、プロモーションチームの催しである。

- 3/10 松本みすず細工しご展 座談会竹外 宮澤功、社主。
- 3/17 流山・真澄農園でかご編み教室。教える人 朝倉美比社主
- 3/18 教室。教える人 朝倉美比社主
- 3/24 十カラ塾主催「アトク...宮澤賢治」ピアノ 神武夏子 朗読 社主
- 3/31 「竹にまつわるお茶や話し」弁士・社主 千葉泉と茨城県との境界近くにある街の我孫子(あひこ)市で催されるクラフト展の会期中の晒し行為。展示会の名は『いるる春』展。

3月

日	月	火	水	木	金	土	日
4	5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31				

○印は出勤日

本紙の送付希望の御人は下記のアドレスへ申し出あるべし。

- 鳩川時代 623
- 郵便振替 00160-1-11979
- E-mail maotomo@island.dti.ne.jp

既に11月号の覽を望まれる方は「十カラ塾」のホームページで「ピンぞ!!」

http://www.totarajuku.sakura.me.jp

二番目がカゴ編みのワークショップ。流山市のアケ(吉田篤)が主催する真澄農園のビルハウスの中で。会期は二日間。江戸川沿いに広がる田んぼ地帯の中に位置している。交通が便利で都心の秋葉原からツクバ・エキスポ・スで二十分。それなのに純農村地帯が地の果てまで続いている。会の詳細は同封チラシで。

△ △ △

三番手が晒しの最たるもの。「雨ニモマテズ...」とやるもんだ。ピアニストの神武夏子さんの足と口は、はらないうよう。カンバラウ。それにしても鉄面皮だねえ。これもチラシと一緒に見られ。入ひまびさか。

四番目は竹カゴの即売と講話。早春の手賀沼。

止まったり動いたり

2/5 水道工事。近隣の六戸で山から湧き水を各戸に導いている。その

導水パイプが途中で断られた。

その補修をする。

2/8 岩手花巻を訪問。雪と氷の街にいろ

えあがる。宮澤賢治の研究書の書影に

ビッパリ。

2/9 刈谷高志二行五人が来る。雪の長岡市

から。田畑は雪に埋まり、冬季はタビ

に出る機会が多いらしい。この月号出る

ころは四國の徳島にはいはず。復食は

軽トラの荷台に建てたマンションで。

2/16 新作。パンコンバツグの試作を終える。

2/19 カメラマンの老川健一氏来る。竹の手芸書

オニ璋制作のために、2/23まで合宿。

撮影する対象は、パンコンバツグと

くずカゴと米揚げザル。

2/25 トカラ塾の日。東京、梅ヶ丘の料理

カで。講師は稲垣一雄氏(トコシ)

テーマは「久高島&入神島訪問記」

2/26 江戸前中「宮澤賢治の会」の音合の

せ。神武氏の「ア」に社主の朗読がついて

三時半半の作業で社主のバンドが少々かれる。

2/26 秋葉原の電気街を一雄氏とブラつく。

日曜日のためか、表通りも裏路次も

祭りの賑わいである。

2/27 日中は流山でのカゴ編みワークショップ

用の竹ヒゴ作り。夜は松本での講話の

下準備

2/28 竹ヒゴ作り。雪が降る。屋外作業な

ので、空想。

2/29 竹ヒゴ作り。空想。

3/1 竹エホエ陶芸のグループ展を競に上京。

御徒町の丁良高架下のおしゃれな空間

でやっていた。別府の竹の訓練校出身者

が何人かいて、きれいなカゴが並んでいた。

若手の竹工家がつぎと成長して

いて、たのもしいかぎり。田圃まで。

3/2 江戸前中から雨。雨カッパを着てヒゴ作り。

奥のくにのつづいすが鳴き、膝の上にはゴキ

ブリの赤ちゃん降ってきた。頭上の桑の

木の枝から足をすべらしたらしい。ゆれれも

ない蔑視に晒されてる一旅であるが、膝

の上の赤子があまりにかゆいし、かつたので、

スケッチしようと思いい、ゴキに一時保護した。

へこれから先は近未来のはなし

3/3 痴報籠屋新聞ミニ号を全国へ発送

総部数三五十余。

3/4 鴨川を早朝に出て、松本へ向う。夕オ

みずす細工復活プロジェクトの面々と飲む

市内(豊洲)の「富貴」で。

3/6 みずす細工の手しごと展

3/7 流山の真澄酒場で茶ワンがご作りの

3/8 ワークショップ。参加者三十人。

3/24 トカラ塾主催「ナニトナク」宮沢賢治

3/31 「いるる春」展 於千葉県我孫子市

△ △ △

本紙バックナンバー探査御礼

舟木拓生の呼びかけで、本紙のバックナンバーの掘り出しに成功した。多く読者の協力を得て、お十号までが復刻可能になった。

十号と本舎へ送ってくれたのは、土佐市在住の綾井便氏であった。『あや、つうしん』(既刊二十三号)の主筆であり、建築家である。『建築を行く』韓国編が上梓されるはず。

△ △ △

今回、日と目とめた旧刊から、いくつか拾い読みしてみようか。

◎一九九三年二月の十一号から。

「当新聞も創刊してはや十余年。発行回数も二桁に突入した。が、その間に熱い読者の声は何も聞こえてこなかった。しかし、編集者の心はヘーヘータンタンの

編集者の心はヘーヘータンタンの

「鈍い」の声をまた耳に入ってきた。籠屋は手先を動かしてこれはいい。その間、頭のほうは、まっ白けのカラッポ。暇な頭の中は自問自答が、たまにではなく、たえずくり返えされる。『父する人』の泣き笑いのやりとりもおこた

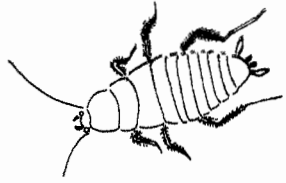
りない。(中略)「これで終わり」とは思わないが、『父の』会話はおまきることがない。相手は目替りであるが、また必ずまた戻ってくる。それは、今ここの年、習いである。

△ △ △

ドミニカ島の
おはこんと緒
にポリビアの

錫鉱山にもぐり
田代英助オジと
秩父の山中を遊

<3月2日の天降りの友>



げ回る。馬場のヒドクラウドのシルエットをビッグホーン川の上流で見失い、デニス・バックスの行進についていく。そして、そこには、坂元新熊公翁が、明りを失った目で、悪石島の荒波を眺め、テラス・ウザラが、零下三度の森林の中でうたたねをしている。

『父の』会話は、尽きることがない。」「
〇。〇。〇。〇。

ついでにもうひとつ拾ってみようか。

◎一九九六年九月の十三号から。

『浮きまくりのレポート』二月十七日記。

春のうらうらかさは幸せの知らせか。頬をなぐる風の冷たさに、『まだ、まだ』と言って春をたしなめる。

エンドレスな彷徨に区切りはあろうはずもない。欲は欲を呼び寄せ、『浮きまくりの』日常巾を余儀なくされる。(↓次頁)

新聞 読者のカネの 収入 増え 読者の 収入 増え 読者の 収入 増え

読後感

欲と直面しているときは、この身に。ワ
リと寄り添う欲が浮力をおさえてく
れるから、自分の日々のありかたに
づかずにすむ。それが、欲に横目と
向けたとたんに、押える力は頼りにな
らず、浮力にまかせて身悶えする
のだ。滑空する助走力が不足し
地べたまはにすり回って日が暮れる。
この世と向のひかりも見つけられ
ない。と想うとき、食のみの醜い
奇形児ではない。その奇形を正當
な目で奇形としてとらえるが、
もはや、道はない(アタリマエ)。

△ △ △

十六年前と今と、どう異なる
のか、それを探すのには
苦勞する。生涯のおお仕
事は、自分のおまりのよう
だ。

近ごろ本社に贈られた通信を紹介します。
贈り主に感謝します。

『フリードから Vol.18』 野外活動研究会(名古屋市中)

社主が三十歳のころに出発した会、路上観察

を始める、会員の個々が選んだ文化財の收藏

は幅広くかつまた、ぼう大である。名古屋を

中心に活動している。URL <http://yagaken.org/>

『イマージュ』通巻七一九号

ホームページ <http://www.ne.jp/asahi/majju/taihen/>

大阪市内に拠点を

もつ劇団・態度交

の情報誌。今号は

は老優・福森慶文

之助の「バード」を待た

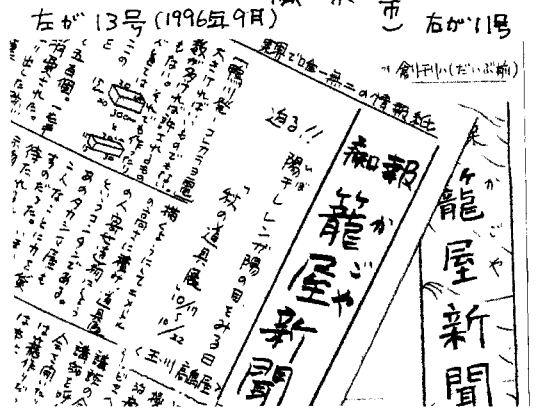
から「ハゲヤク」の案

内と劇団態度の

存続の危機と訴

えている。
『あやこ』vol.23

右が11号



△ 龍屋新聞 (青梅市)からの妙文

△ 尚平

尚平さんの妙文の風ぼうに自見せ

られ、あちこちからその時

照らした人たちが竹屋屋主

社にあつては、ゆくりと

くみくらんで、

あやこさんのようにふるこんで、

梅 23.25-18